

「弥生土器」の発祥

岸 井 貫

(昭和二十二年理甲)

日本の考古学では最近の数十万年間の年代は・・・旧石器時代(末期を「岩宿時代」とする場合がある)↓縄文時代↓弥生時代↓古墳時代↓飛鳥時代↓・・・と編年・区分されている。「弥生時代」という言葉は、向ヶ岡弥生町から出土した「弥生町土器」から来た。実年代はおおむね紀元前二百年から後二百年の間とされる。

それに先立つ縄文(縄紋とする場合もある)時代も、その時代の特徴である「縄文土器」の名前により名付けられた。縄文時代は日本の「新石器時代」でもある。

弥生町土器の発見は、東大予備門生徒であった有坂鋁蔵氏(明治二十年理科。東大教授・海軍造兵中將)による。当時は前記のような編年が確立していなかったし、現代と遠い遠跡の性格よりも遺物の方が重視されていたので、出土地点は明確には報告されていなかった。四十ないし五十年後の当事者の回顧談を頼りに出土地点を探す試みが何回か

行われたが、確実な結論にはまともななかった。有坂氏自身も日清・日露・第一次大戦の公務の繁忙を経られて、記憶が薄れたと言う事情があったかも知れない。

昭和五十年頃に東大内の発掘調査で一つの結論が得られたが、未だ別の意見は残る(後述)。

平成六年末頃、東京大学総合研究資料館でこの土器が展示され、関連して藤本強教授がこの問題について講演された(一)。それによって経過の細部を検討し、同窓会名簿と対照して見ると、遺跡が東大・東大予備門・一高に隣接するという場所柄のせいも、関係者に先輩の方々が多いことに気づいた。本稿は先輩方のこの問題との関わりについて記す。先輩方の御経歴は名簿により記すが、必ずしも問題にしている時期の御身分ではない。

昭和五十五年頃までの研究史については文献(二)が詳しい。最近の東大キャンパス内での増改築に伴い発掘調査

が数多く実行されて、新しい知見が増してきた。藤本教授の御講演はこれらを含んだものであった。

「向ヶ岡」一般についての鈴木孝一（昭和十一年文丙）氏による論考が本誌に掲載された（三三）。この「向ヶ岡」は上野の忍ヶ岡から向こうに見えるということによる。この地域には明治維新前には前田家・水戸家・富山藩・大聖寺藩・小笠原家などが屋敷を構えていたので、町名が無かった。維新後に町名をつける必要に迫られたが、水戸藩邸内に「文政十あまり一とせといふ年のやよひの十日・・」として

名にしおふ春に向ふが岡なれば

世にたぐひなき はなの影かな

と詠じた徳川斉昭（烈公）の和歌を刻んだ石碑があったことから、「向ヶ岡弥生町」の地名が与えられた。

鈴木氏の文章には、烈公の和歌とともに小野小町の

むさし野の向の岡の草なれば

ねを尋ねてもあはれ（または「あはんこ」とぞ思ふ

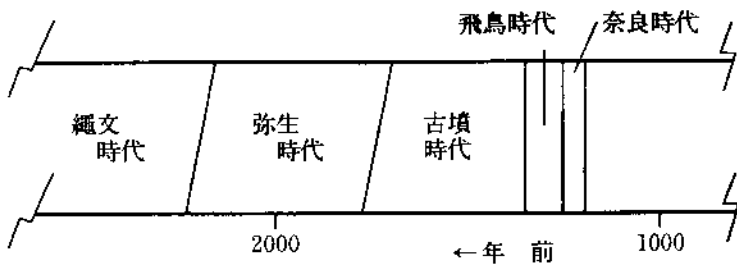
が引かれている。

有坂氏は子供の時から土器・石器に興味を持ち、またエドワード・S・モース（一八三八―一九二五。大森貝塚の発見者。明治十一年頃東大教授。また「コード・マーク」繩紋Ⅱ

繩文」という言葉を発案した）の弟子であった義兄の石川千代松氏（明治十一年理科。東大教授・植物学）の紹介でモースにも会い、考古熱を高めていた。

有坂氏の後年の資料（複数）の一つによると、明治十六年六月頃に「東大医学部の裏の・・射場の西北に貝塚が根津の裏の高い丘の上にあった。一面の草原で・・上野の森や不忍池を望んでいた・・」。翌年にそこで土器を見つけて貝殻層の間から抜き出した。「今考えれば向ヶ岡貝塚は弥生式の貝塚と思われます」。

一方同じ頃、東大在学中の白井光太郎氏（明治十五年理科。東大農学部教授）も、坪井正五郎氏（明治十四年理科。東大教授・帝国学士院会員



日本古代の時代編年と実年代

・人類・考古学)らとともに遺跡を探索していて、向ヶ岡貝塚を発見した。有坂氏と白井・坪井両氏は石川氏の仲介で出会い、三人は連れ立ってこの貝塚へ出かけた。明治十七年三月二日であった。坪井氏が貝塚の模様をスケッチに残された(明治二十二年発表)。

有坂氏の回顧談(五編)のうち三編は土器をこの日に発見したとしているが、他の回顧談ではその少し前に一人で発見したように解釈される(二)。

土器は比較的平坦な表面を持っていたが、首の下あたりに縄文(この場合は織物で印刷した「縄席紋」)を持ち、その上に豆型突起紋を持っていた。その上方にある口部は失われていた。



弥生町土器 (高さ二十二センチ)

このようなことから、当時はこの土器が「貝塚式土器(現在の呼び方は「縄文土器」である)」と別のものであることは気づかれなかった。多くの研究と論争を経て、縄文土器とは違う土器と

して「弥生(式)土器」が認識され、弥生町土器を標式品として名を与えられたのは明治二十九年、この名が定着するのは大正二年頃とされる。そのすぐ後に、「弥生文化」が縄文文化と別のものであること、両者の間に年代差があることが相次いで判明し、次いで長谷部言人(明治三十五年医科。東北大医・東大理教授。人類学)教授が、両文化を担う人の間には人種の差がなくて、いずれも日本人の祖先であると主張した。

同じ頃、中山平次郎(明治二十九年医科。九大医学部教授。病理学・考古学)教授が、北九州地域の古代墳墓で弥生土器の大甕棺が青銅器・ガラス製品(壘・珠)・鉄滓を伴うことを明らかにした(大正九年頃)。遺物中には前漢後期・新・後漢初期の年代(西紀元年前後)を明らかにする鏡・貨幣があった(四)。

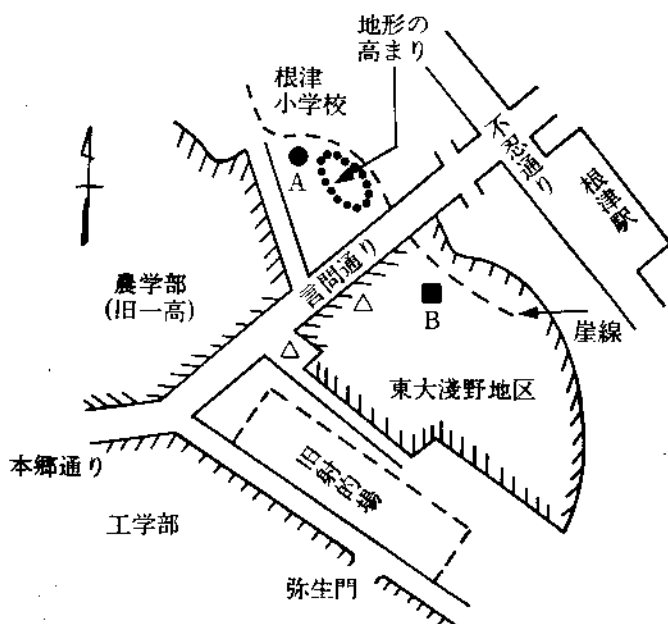
九州地方での考古学的研究には、医学部教授の傍ら遺跡の研究を続けた中山教授の貢献が大きい。中山教授は十八歳の少年の頃、一人で「指導者といふべきものは遺跡および遺物だけであり、その第一指導者が向ヶ岡貝塚である」という状況で探索を続けていた。西片町に住まわれることになり、「百数十回もこの貝塚に通」い、坪井教授のスケッチを頼りに土器の出土地を探された。

このスケッチでは前方に低地があり、これを隔てて上野

の山が見える。右手には木々が生えた高まりがあつて、不忍の池は遮られて見えない。中山少年はこれに該当する地点（地図のA地点）に、貝塚と黒曜石片、石鏡土器片を見いだした。A地点は現根津小学校の南にある崖の上一帯である。



坪井氏による「向ヶ岡貝塚より上野公園を臨む景」（東洋学芸雑誌九一号より）



弥生町付近の地図（三角形は石碑を示す）

から掘り出したといふて居られた。ここは高等学校の外圍に近接して居るから、一高入學以來構内を・・・(探したが遺物を見付けたことは)・・・一回もない。却つて大學構内の裏門近くで打製石斧を拾ふたことが二回程ある。

また弥生町土器について「繩文的粧飾を有した弥生式即ち洋服着た日本人と同意味」と表現された。同教授は常に弥生時代遺跡が貝塚に伴うかどうかを注意して調べられたように、その実例が多いことも経験された。

中山教授は「漢倭奴國王」金印の出土地(博多・志賀の島)についても、向ヶ岡遺跡の場合と同様に綿密な調査・記録・推定をされている(明治末年)。

その後の幾人もの研究者の度重なる探索でも、弥生町域での貝塚・繩文土器の出土は度々であつたが、弥生時代遺物・土器の確實な発見は無かつた。

「弥生時代」はその後、奈良県・唐古遺跡によつて農耕社会の時代であることが判明し(昭和十一年、静岡市・登呂遺跡でこれが完全に実証された(昭和二十三年頃)。ここで、弥生時代は農耕の時代、繩文時代は狩猟・採集の時代、というイメージが固まつた。貝塚は繩文時代のものとするのが通念である。

昭和四十九年に東大の浅野地区(旧浅野公爵邸を昭和十六年頃買収したもの)で、小学生達が土器片を拾つたのが

きっかけで、貝塚と弥生式土器片とが発見された。現地は東側に根津の町を見下ろす崖際で、繩文・弥生両時代の土器片が混在していた(B地点)。A・B両地点は共通の崖線に臨んでいる。

ここには高エネルギー実験棟の建設計画があつたため、東大人類学・考古学両教室合同で緊急発掘した。深さ二、三メートルの二本の交差する溝があり、捨てられた貝殻とそのそばから五個体の土器が得られた。この溝を環濠として囲まれていた住居跡であつたとされる。地形、環境などには坂氏の回顧談とも良く合うと判断された。この状況は藤本教授の御講演でスライドで示された。

この地点は江戸時代の工事で土をかふせられ、そのため昔の遺跡が比較的变化少なく残つたのであつた(一)。

その後の研究史は人類学教室で発掘に従事された今村啓爾氏がまとめられた。B地点で発掘した貝殻の種類比や土器片の繩文/弥生形式比を検討して、弥生町土器の出土をA地点とする議論がある(六)。A地点は現在は舗装され住居化されて、地下を再研究したい状況であるが、もし将来幸運な事情があれば、A・B両地点が一つの環濠で囲まれた一体の遺跡であると認められるかも知れない(二)。

弥生町遺跡は関西・西日本では環濠集落が消えた時期に対応しており、それに較べて環濠の消滅時期が遅れていた

と判断されるのとことである(一)。

地下鉄根津駅から言問通り(土器発見当時は無かった)を登ると、切り通された道の両側が高まっていて気のせいか如何にも貝塚のありそうな地形だと感ずる。遺跡は縄文貝塚と弥生土器が共伴していて調査を迷わしやすかった。弥生町土器も東海地方のものの特徴を示し、弥生時代後期に相当するのに縄文を残しており、類例が少ないそうである。これらが問題の解決を遅らせてた原因であろう。

さらに浅野地区の外堀に沿って坂を登ると、西の隅に弥生町遺跡の碑(昭和六十一年建設)がある。

戦後の町名改正の動きの中で、地名を「根津」に統合されようとしたのを住民達の反対運動により「弥生」を残したという経緯がある。「昭和二十九年、行政措置によりこの町は弥生二丁目と変わりましたが、町会名は歴史的な名前を継承しております(同碑)」。町会名は歴史的な名前の太田博太郎東大工学部教授が加わられた。

浅野地区については、永田武(昭和八年理甲)教授の御講義を聴講するために、弥生門を出て地球物理学教室に行っていた時期がある。当時は高い建物は無かった。弥生町土器発見の頃に近い景観であったかも知れない。

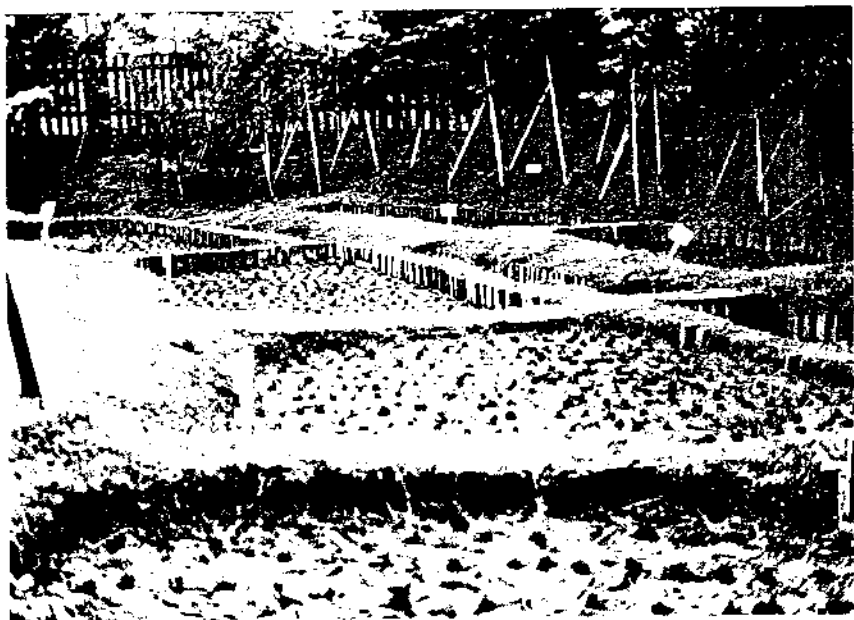
私の恥を言えば、三、四年前に大阪府弥生文化博物館を訪れた時、弥生町土器を飾ってあったのを見た。かねて名

高いこの土器の所有・保管者を知りたいと思って職員の方に「何処から借りて来たのですか?」この所有ですか?と聞いたところ、「あれは模倣ですよ」と軽いなされてしまった。恐らく東大の資料館にあることまでは御存知なかつたのであろうと今推測する。

弥生時代は研究の始めの頃は長閑な農耕社会というイメージを持たれていた。これには「弥生」の名前からの連想もあるし、唐古・登呂遺跡の発掘もそのようなイメージを強めた。しかし最近では環濠、逆茂木、見張り塔、首のない人骨などの出土で、国々が成長して行く戦乱の時代であることが明らかになった。これは魏志倭人伝の邪馬台国に先立つ「大乱」に対応するとされる。ついでにいえば、登呂遺跡も安倍川の氾濫によって埋没し放棄されたのであつて、住民達は「弥生」を謳歌してばかりはいられないのであつた。

さらに最近では、稲の体内に生ずるケイ酸質小体(プラント・オパール)の研究により、北九州では縄文後期に水田での稲作が行われていた(最古のものは唐津市菜畑遺跡)ことが知られ、縄文・弥生両時代の区分の再検討が論じられている。「弥生時代」の研究には更に統こう。

本稿は同窓生名簿に負う所が大きい。編纂関係の各位に



菜畑遺跡水田を復元したもの (唐津市・末盧館内)

謝意を表する。有坂氏の回想には沢井廉、佐藤勇太郎、井上圓了(いずれも明治十四年)、神保小虎(明治十六年)、白井頼吉(明治二十年)など諸先輩の名も見える。

「やよい」の歌碑は浅野地区内に保存されている。付近には区が設けた説明板が幾つかある。

引用文献

- (一) 藤本強教授 平成六年十二月三日 東大総合研究資料館「東アジアの形態世界」展に関連した講演
- (二) 植野武 「弥生町遺跡」森浩一編 日本の遺跡発掘物語3 弥生時代Ⅰ(東日本) 社会思想社(昭和五十九年)
- (三) 鈴木孝一 本誌三〇巻二号(昭和六十三年)
- (四) 中山平次郎 考古学雑誌一一巻一・二・四号(大正九年)
- (五) 中山平次郎 考古学雑誌二〇巻二号(昭和五年)
- (六) 今村啓爾 「東京都弥生町向ヶ岡貝塚」探訪弥生の遺跡 畿内・東日本編 三八九頁 有斐閣選書(一九八九)